

もう一人の「森の女」

——『三四郎』における看護婦表象をめぐって——

李 南 錦*

Another “Forest Woman”

——Through the representation of the nurse in 『SANSHIRO』——

LEE Nam-Keum

abstract

One of the most impressive scenes in Soseki Natsume's 『SANSHIRO』 is that Mineko and Sanshiro meet on a campus by a pond. The picture of “Forest Woman” describing Mineko has provided an ample information for discussions of her character. However, there is another woman character who has yet not been mentioned in any of existing discussions. That is a ‘nurse’.

This paper studies the perception of the history of nurses after the Meiji Era with the analysis of [The Nurse] in a short novel called Huyō Oguri. In addition, by analyzing Mineko, perceived as “New Woman”, and the nurse together, it defines the relations between the image of “New Woman”, which has been construed as the subject of a dualistic desire conveying conflicting ideas of ‘a sexual seducer’ and ‘a wife of noble character’, and the emblem of the nurse perceived as a dualistic image of ‘a white-robed angel’ and ‘femme fatale’. On the basis of these facts, this paper discusses the possibility of transformation of ‘a white-robed angel’ into a wife of noble character called, ‘the angel in the house’.

Keywords : 『SANSHIRO』, “Forest Woman”, Mineko, the nurse, ‘a white-robed angel’

はじめに

夏目漱石『三四郎』¹において、大学の池の辺で美禰子と三四郎が出会う場面は、最も印象的な場面である²。小説内で、この時の美禰子を描いた「森の女」の絵は、今まで様々な美禰子論の的となってきた。「森の女」美禰子は、池の辺でじっと見ていた三四郎の視線によって読まれ、見る側の欲望によって感覚的にその色や行動が描写されていた。

しかし、この場面には、従来の『三四郎』論において論じられずにきたもう一人の女性人物として、「看護婦」が登場する。『三四郎』に看護婦が出てくるのはこの場面以外には殆どなく、ほんの短い間の登場なのだが、本稿で注目したいのは、何故、美禰子と看護婦と一緒に登場し、詳しく描写されたのか、という問題である。本文に現れる色彩の描写は、美禰子のみならず看護婦にも及んでいるのだ。

本稿では、この看護婦に着目することで、『三四郎』への新しい視角をひらきたい。三四郎の視線によって見られている女性たち、即ち、「汽車の女」、汽車で偶然見かける「西洋人女性」、「美禰子」、「よし子」などの女性

キーワード：『三四郎』、「森の女」、美禰子、看護婦、「白衣の天使」

*平成16年度生 国際日本学専攻

を表現する際、必ず色彩の描写が出てくるが、看護婦に与えられている「白」の意味合いは美禰子のような〈新しい女〉たちとどのように結び付くのだろうか。それを通して、『三四郎』が書かれた当時の看護婦への認識と共に、所謂〈新しい女〉として評価されてきた美禰子像と〈白衣の天使〉として流通されてきた看護婦の表象には、どのような関連性があるのかを考えてみたいと思う。

1. 明治・大正期における近代看護婦の歴史

明治21（1888）年2月から看病法の講習を始めた東大病院では、既に明治17～18年頃から、病院所属の看病人の他に患者個人が契約した付添看護婦が入っていた³。明治元（1868）年から「大病院」（東京大学医学部付属病院の前身）では、患者の世話や病室の掃除などをする碑僕という存在が当時の看病人であった⁴。近代医学を取り入れた日本の病院には、極く初期の頃から、主に診療の介助者になる病院所属看護婦と、患者の身のまわりの世話をする付添看護婦が存在したが、特に「明治二〇年代に生まれたトレインド・ナース（Trained Nurse）たちは、全く訓練を受けていない前記の付添看護婦（Untrained Nurse）に取って代って病人に付添い、近代看護の知識と技術をもって、病人の世話を看護（Bedside care）に置き換えた」⁵とされている。

日本の最初の近代看護教育は、明治維新以降、明治17（1884）年頃から、外国の医学部へ留学した人や外国人宣教師たちによって作られた「看護婦養成所」を通して始まる⁶。初期の看護教育は、看護婦教師を外国から招き、レベルの高い教育がなされたが、訓練を受けた看護婦（Trained Nurse）による派出看護は、特権富裕層だけに求められ、庶民にまで行き届かなかった。そこで、米国人宣教師ミセス・ツルーが立てた「桜井女学校付属看護婦養成所」の一期生で、宣教師英国人看護婦でナイチンゲール看護学校出身のアグネス・ベッチ（Agnes Vetch）から実習指導を受けた鈴木まさ（1857～1940）が、派出看護の母胎となる「慈善看護婦会」（明治24（1891）年11月）を創設する。英語もできた彼女は、庶民や貧しい人たちのために派出看護費用を減額・無料にするシステムを設けるなど、看護という職業を一般庶民たちにも知らせる努力をした。このような看護婦会の活動の他、日清戦争（1894～1895）・日露戦争（1904～1905）に動員された日本赤十字社救護看護婦（以下、日赤看護婦）たちによって、女でも看護婦なればこそ、お国のために戦争に参加できるのだといった雰囲気が高揚し、看護婦志願者が増える。そして戦争を通して「看護婦」という「白衣の婦人」の存在が知らされたこともあり、看護婦は社会的に定着し、大衆化していったのである⁷。このように、看護婦という職は女の職としては人気のある職で、比較的給料も高く、国のために仕えるという崇高な名分もあったが、様々な看護婦会が続出することによる弊害も増え、特に、日赤看護婦や病院所属の看護婦以外の付添看護婦の中には、風紀を乱すイメージを量産する者も現れたようである。

2. 小栗風葉の「看護婦」を通して見る看護婦への眼差し

明治29（1896）年に発表された小栗風葉（1875～1926）の短篇小説「看護婦」には、病院所属看護婦と付添看護婦の様子が描かれている⁸。主人公稲葉は腸チフスにかかり、意識が混濁した状態で神田和泉橋病院（帝大第二医院）に入院しているという設定だが、実際、風葉は明治28（1895）年8月から10月まで疑似コレラで入院していて、この小説はその時の体験をもとに書いたと知られている⁹。次の会話は、朝、病室での看護婦と主人公の会話である。

「（前略）…無遠慮に私の掛布団を引剥ぎて、何やらむ、管のような冷き物を我左の腋わきに挟みぬ。我はこの一面識ひじもあらぬ女の、然りとては不躰ふしつけなるを腹立たしく、直にその挿したる管を振放たむとしたりしに、ああ！我が腋は真直に伸びたるまま、あわれ、それさえ成らざりき。…（中略）…『何だ、お前は？』殊更おちつ沈着きたる調子の、いと温和おだやかに問いかけたるつもりなりしに、我が声は案外にも高かりしなり。

『私？』とかれは眼をみはりしが、やがて嘲ける如き微笑えみを浮べて、『誰だか考えて御覧なさい』

『考えろ？』我はこらえかねて叫びぬ。身の知らぬ女の余りなる狎なれなれしさに、我は侮辱せられたらむやうに思われて、平常つねの体ならむには、物をも言わず室外に突出さむばかりに激したるが、…（中略）…こ

の無礼なる女は付添看護婦というなる一種の看護婦にやわらむ、薄汚れたる滑綿布の看護服をぞ着けたりける。」(p.214~215)¹⁰

このように、教養のない付添看護婦に対する主人公の怒りが表現されている他、病室で患者の陰口を言う看護婦たちに対しては、「我はその余りなる可卑さに呆れぬ。元より彼らは大なる博愛の心ありて、か弱き一身を費に、世の病苦に悩む人を救はむなど、然る高尚なる観念を抱けるものとは思はざりけれど、他に女の為すべき業も多かるに、好みて憐る間に身を置く看病婦の、少しは普通よりも病人に対する同情の深かるべきと想ひしに、図らざりき！彼等の患者に接するや、さながら遊女の日ごとに代わる票客に接するが如きなり。」(p.221)とあって、付添看護婦のことを「遊女」にまで喩えている。

その反面、病院所属看護婦の「英子」の描写は、「ふと何やらむに驚かされ、そと心着きて眼をみひらけば、そこに付添ならぬ他の看護婦の別に立てるあり。…(中略)…今更にその気高き美色に打たれて、おのずから全身も戦かたれつ。雪のやうなる看護服を着けて、緑なす髪を夜会結びに束ねたるまま、他に一色の飾とて無き瀟洒なる装は、却てその気韻をば高めたり。…(後略)」(p.218)のように、気高い、教養のある美しい様子で、「雪のような看護服」を着ていると表現されている。これは、看護婦に対して通用された所謂〈白衣の天使〉というイメージに重なるものであろう。この主人公は英子という病院所属看護婦に一方的で妄想的な恋をしているが、小説では、その病院所属看護婦「英子」は「美しい神女のような」(p.221)女性、付添看護婦は卑しい「遊女」のような女性として、対比的に書かれている。

しかし、最後の場面で、主人公にずっと親切さと慰めをもって励ましてくれた英子は突然、「稲葉様、私は、私は定まった夫の有る身です！」(p.230)と、しかも意識混沌状態の稲葉の耳に口を寄せて囁く。意識を失う直前に、恋した「神女」のような看護婦に衝撃的な言葉を言われ、その後ようやく意識は蘇ったものの、稲葉は「神経痴鈍なる哀れの唾」(p.230)のようになって小説は終る。最後まで、主人公の一方的で妄想的な恋に対する反省などは一切出てこない。むしろ、最後に突然出てくる彼女の意外な言葉、しかも主人公が気を失う間にそのような言葉を耳元で発する、という設定を通して、読者は男を翻弄する英子の妖婦性を感じ取ることになる。つまり、付添看護婦の卑しさや「遊女」のような振舞いと〈白衣の天使〉のような病院所属看護婦の英子とは対比的に書かれたように見えるが、実は英子にも男を翻弄する「遊女」のようなセクシュアリティが内在していたのである。それは、看護婦が男性の眼差しにおいて性的誘惑の存在として認識されていたことを窺わせる。

実際、明治・大正期の「読売新聞」における看護婦関連記事を見ても、日赤の従軍看護婦に対する称揚の記事が多い一方で、美貌で男を誘惑する看護婦に関する記事なども見える。特に明治41(1908)年6月28日朝刊の「大学生、看護婦に欺かる」という題の記事は、「色白の瓜実顔当世ハイカラ式の美人」看護婦と入院していた時から付き合い始めた法科大学生が、同棲しているうちに彼女に夜逃げされ、捨てられたという内容で、その看護婦のことが「妖婦」として書かれている¹¹。

そもそも日本では、病人の看護は肉親や親類などの身内の仕事で、病人が他人の世話になることは恥だという考え方があり、看護は同属意識が生んだ奉仕で、無償の私的行為であった。よって、近代的な看護婦の存在は容易に理解されるものではなかった。村上信彦氏の『明治女性史』によると¹²、明治初年東大付属病院に入院患者ができた頃、看護婦を雇うにも看護婦になり手がなかったので、やむを得ず吉原の遣手婆さんを連れてきて看護にあてたという。そのような看護人は看護婦でなく、「普通の婢僕」、男女を問わぬ召使であり、「下女、下男が病人の身の回りの世話をする程度のものであった」。このような看護人に対する認識が看護婦に対する偏見をもたらしたこともあるだろう。男性中心的な明治社会における看護婦への「偏見の第一は、女だてらに見知らぬ男に附添って看護などするのはゆきすぎで、大胆きわまる行為であり…(中略)…実際にやっていることは雑用に毛の生えた程度だし、職業意識もろくになく、態度や振舞にも欠けるところが多かった。これが一般的な看護婦のイメージを形成して世間の尊敬を得ることができなかった」¹³とされている。

男性の身体との接触があるという面から、彼女らがセクシュアリティの対象になることは十分あり得ることであったと思われる。そして、生理や病理などの近代的な医学知識を学んでいた日赤看護婦の場合も、それらの知識や技術より先に彼女らに要求されるのは「お国のため意識」で、国のためにはどんな無理でも困難でも耐えねばならぬという犠牲の精神であった。実際、日清・日露の両戦を通して、「患者のために一身の健康やときには

生命の危険もかえりみず献身することは、看護が肉親や身内の間の介抱であった伝統の形を変えた再生であって、社会的な職業であるべきものを使命感にもとづく天職とすりかえる結果になった。これがのちのいわゆる〈白衣の天使〉の発生¹⁴となり、天使として観念的に美化された看護婦イメージを生産したのである。実際、日清・日露戦争の後、イギリスのクリミア戦争の前線病院で変革を成し遂げたフロレンス・ナイチンゲールを模範とする看護婦イメージ造りを図っているような新聞記事も多く見られ、「白衣の婦人」というイメージが量産されたが¹⁵、この事実は、看護婦に対する「妖婦」的なイメージと「天使」のイメージが同時に流布されていたことを裏付ける。

3. 三四郎の眼差し—「白」の意味するもの

では、明治41（1908）年に発表された『三四郎』における看護婦はどのように表象されているのか。これを考えるために、まず「白」という色彩表現について考えてみたい。

前田羽城氏は、「人はいつも色や、あるいは色彩名にある種の感情をもって接している」¹⁶と述べたが、「白」は一般的に「清潔、純潔、清楚」などを象徴し、古代の人たちは「ある物象が忽然としてまったく異質の物に変ずる、つまり、化ける、という、呪的で神秘的な現象をひきおこす物の色」¹⁷と認識した。また、西洋、東洋を問わず白は「神の色」であり、最も尊い色として畏敬された色で、「聖母マリヤ」や「天使たちの衣裳」の象徴、「純潔、清浄、純粋」などを象徴する色として用いられている¹⁸。

『三四郎』には色の描写が多く、「三四郎は九州から山陽線に移って、段々京大阪へ近付いて来るうちに、女の色が次第に白くなるので何時の間にか故郷を遠退く様な憐れを感じていた。…（中略）…何となく異性の味方を得た心持がした。」（一の一）のように、三四郎が「汽車の女」と出会う最初の場面から色の描写は目につく。「汽車の女」と名古屋で同宿することになった時も、「驚き」を感じた三四郎は、「蒲団の真中に白い長い仕切りを拵らえた」（一の四）。この「白い仕切り」によって三四郎は彼女との距離を保ち、自分の感情を抑える装置としていたが、この「白い仕切り」も結局、「汽車の女」に対する不安感を表わす。三四郎にとって、「お光さん」の「九州色」、美禰子の「狐色」とこの「汽車の女」の肌色は、故郷の色で、「異性の味方」のような落ち着いた色であったが、「白」は「嫌」で「不安」な色であった。

さらに、「髭の男」（広田先生）と浜松で弁当を食べていたとき、汽車の窓から見かけた「西洋人女性」に対し、三四郎は「女は上下とも真白な着物で、大変美しい」（一の八）と感じる。この「真白な着物」の西洋人女性は、三四郎にとって「肩身を狭く」感じさせる「珍しい」、「上等」な存在であった。彼女に対し、「どうも西洋人は美しいですね」（一の八）と言う三四郎に対し、「髭の男」は「御互は憐れだなあ」、日本は「亡びるね」、「囧われちゃ駄目だ」という言葉を連発して、三四郎を当惑させる。三四郎にとって「白」のイメージは、〈未知、不安、珍しさ〉として形成されている。

二章で、東京に着いた三四郎は、「現実世界」の「劇烈な活動」に「不安」を感じる一方、「汽車で乗り合わせた女の事を思い出した」後は、「現実世界はどうも自分に必要らしい。けれども現実世界は危なくて近寄れない気がする」と感じる。「劇烈な活動」は「汽車の女」へ、また「現実世界」へと繋がる。四章における三四郎にできた「三つの世界」のうち、「春の如くうごいている」、「凡ての上の冠として美しい女性がある」「第三の世界」は、「劇烈な活動」のある「現実の世界」になる。つまり、上述した「不安」を感じさせる「白」のイメージは「第三の世界」と繋がり、その世界を代表する「女性」と関連づけられるのである。

ここで、三四郎に与えられた「現実の世界」における「白」のイメージの女性として、二章に登場する「看護婦」と、三章で三四郎が始めて会う「よし子」が取り上げられる。

「もう一人は真白である」、「白い方は一足土堤の縁から退がっている」と、「白い方」として描かれている「看護婦」は、森の中の美禰子と共に登場する存在である。

漱石の「思い出す事など」には、「白衣」や「白い着物」の存在として看護婦を描写している¹⁹。さらに、「医師は職業である。看護婦も職業である。…（中略）…彼等の所作がどれ程尊とくなるか分らない」（二十三）として、女性である看護婦の仕事を職業として認めている進歩的な考え方も読み取られる。しかし、このような漱石の看護婦に対する評価は、まさに、世間で求められていた犠牲的な奉仕者としての〈白衣の天使〉の看護婦イメージ

と共通している。

一方、『行人』²⁰で描かれている付添看護婦は、必ずしも「尊き」「ありがたい」存在だとはいえない者であった。語り手は「美しい看護婦」に対して、「看護婦としては特別器量が好いので、三沢は時々不平な顔をして人を馬鹿にしている杯と云った」(友達、二十二)と言いながら、芸者の「あの女」と「美しい看護婦」の関係は、「冷淡さ加減の程度において、当初も其時^{その}もあまり変りがないように見えた。自分は器量好しが二人寄て、我知らず互に^{にく}嫉み合うのだらうと説明した」(友達、二十五)と語っている。つまり、芸者と美しい看護婦を両方とも「器量の好い」者とし、男性の性的欲望を呼び起こすような存在として解釈している。このように、ホモソーシャルな明治社会において、看護婦は〈性的対象〉と〈白衣の天使〉という二重の眼差しで見られていたことが推察される。

三章で三四郎が病院で初めて会ったよし子も「青白い」印象であった。しかも、よし子の寝台の上に敷いた蒲団も「真白」で、よし子の「青白い」顔と「真白」な蒲団の描写は調和を成している。もちろん、病弱な姿を「白い」と表現したとも言えようが、よし子が美禰子と対比的な存在として設定された可能性を考えるならば、よし子の肌色が「白い」のは意図的な設定であり得る。七章で広田と原口は、「自分の行きたい所でなくちゃ行きたくない」、「全く西洋流」の結婚観の持ち主として美禰子を評価する。とするなら、十二章で、「あなたはお嫁に行かないんですか」という三四郎の問いに対し、「行きたい所がありさえすれば行きますわ」と答えるよし子も「西洋流」の女になるだろう。さらに五章では、兄の野々宮と美禰子の関係を男女の「友だち」として認める、「背が高い」「のっぼ」で、「リボン」を結んだ「紫の袴」姿の明治の「東京の女学生」よし子が描かれる。しかも、原口が、普通の日本の女の顔は「西洋の画布^{キャンパス}には移りが悪い」が、美禰子とよし子は「両方共画になる」(七の五)と言ったように、三四郎によって「女性中の尤も女性的な顔」(五の三)、「母の影^{ひらめ}が閃いた」(三の十二)と評価されたよし子も、その内実においては、「青白い」顔色が表象しているように、「不安」な「現実の世界」を代表する美禰子と同類の女性だったのである。今まで、「官能的」で「西洋」的な〈新しい女〉美禰子と、「母の影」を想起させるよし子という対比が一般的な評価であったが、村瀬士朗氏は、よし子のほうが美禰子より「西洋人的な容貌」で、「子供」から「女」へと変貌していく「女学生」で、美禰子とともに男性の「性的な欲望の対象」になっていると述べる²¹。そのような評価を踏まえて考えるならば、「白」のイメージで表現される看護婦とよし子は、〈犠牲の精神に満ちる天使のような女性、聖母のような母性の存在〉である一方、激しく動揺する「現実世界」の「不安」と共に「西洋」を思い浮かばせる「官能的」な存在、男性たちの性的欲望の対象としてのイメージが隠蔽された存在ということができる。

つまり、『三四郎』において「白い」イメージは、単に「西洋」的なものを表すだけではなく、〈女性〉と結び付き、〈見る側〉である男性の視線によって、〈純潔、柔順、犠牲〉のイメージと、「官能的」な〈性的欲望の対象〉のイメージを同時に思い浮かばせるものとして機能している。このことを踏まえながら、「官能的な」美禰子と「白い」看護婦が共に描かれたシーンについて考察してみたいと思う。

4. 「森の女」美禰子と看護婦表象との関連性

美禰子は「煤煙事件」での平塚明子(らいてう)をモデルにしたという説²²から、「無意識の偽善家」²³、「新しい女」²⁴、「謎の女」として多く解釈されてきたが、飯田祐子氏は、「『三四郎』は美禰子が〈新しい女〉になる可能性を消し去ったところに成立した小説」としている²⁵。そして中山和子氏は、美禰子の名刺に関する小森陽一氏の考察²⁶を踏まえながら、「[性的商品、性的記号]としてしか流通を許されぬ「女」である」²⁷と述べてもおり、『三四郎』論のうち、特に美禰子像に関しては、まだ様々な異論が出てきているといえる。

漱石が書いた『三四郎』予告文²⁸のように、作者の意図とは別に、登場人物たちを通して読者にも作者にも新たに知らされるものがあるとしたら、美禰子と一緒に登場する看護婦の表象を通して読者に喚起されるものがあるのではないか。

三四郎が美禰子と最初出会った時の場面は、「不図眼を上げると、左手の丘の上に女が二人立っている」(二の四)と始まる。

女は此夕日に向いて立っていた。…(中略)…女の一人はまぼしいと見えて、団扇を額の所に翳^{かざ}している。顔はよく分らない。…(中略)…もう一人は真白である。是は団扇も何も持っていない。只額に少し皺を寄せて、対岸^{むこうぎし}から生い被^{かぶ}さりそうに、高く池の面^{おもて}に枝を伸した古木^{のぼ}の奥を眺めていた。団扇を持った女は少し前へ出ている。白い方は一步土堤^{どて}の縁から退がっている。三四郎が見ると、二人の姿が筋かいいに見える。此時三四郎の受けた感じは只綺麗な色彩だという事であった。けれども田舎者だから、此色彩がどうい風^{かぜ}に綺麗なのだか、口にも云えず、筆にも書けない。ただ白い方が看護婦だと思った許りである。三四郎は又見惚^{おぼ}れていた。すると白い方が動き出した。用事のある様な動き方ではなかった。自分の足が何時の間にか動いたという風であった。見ると団扇を持った女も何時の間にか又動いている。二人は申し合せた様に用のない歩き方をして、坂を下りて来る。三四郎は矢張り見ていた。」(二の四)

三四郎の視線によって映された〈二人の女〉は「美禰子」と「看護婦」である。この後で、美禰子が「是は何でしょう」と聞いたら、「是は椎」と「丸で子供に物を教える様」に答えてあげる看護婦の姿が描かれている。

上述したように、漱石の立場から考えると、ここでの看護婦は〈白衣の天使〉のように犠牲的な奉仕の女性として描かれたのかもしれない。しかし、当時の職業婦人として看護婦は、外国人宣教師の立てた学校で学んだりもし、英語ができる人もいて、近代医学知識まで備えていた²⁹。第六章の運動会の場面には、よし子が自分の入院の際に世話になった看護婦のところへお礼に行ってくるという内容が出てくる。看護婦は、美禰子とよし子のような当時の〈女学生〉と交流できるほど、近代知識を学び、自意識に目覚めた〈新しい女〉でもあったのである。

しかし、明治・大正という時代を考える際、女性が何かを学び知識を備えるということは、それが男性に役に立つことではない場合、非難の対象になっていた。女学校出身の女性を妻として好んでいた明治の知識人男性は、その女性の学歴から自分のステータスが高められることを求めていたのであって、女性の学歴は、所謂〈良妻賢母〉になるための知識を備えるためにおいてのみ認められた。

近藤正一氏の『女子職業案内』(博文館・明治39(1906)年7月)によると、「女子には無くてはならぬ資格」として、「良妻賢母の資格を作るため」とか「女徳を養ふため」には、「高等女学校」で学ぶ必要があり、看護婦になるためには専門の養成所などに入って資格をとる必要があった³⁰。看護婦という職は、男性医師を補助し、お国のために仕える専門職ではあったものの、男性たちが求めていた「良妻賢母」とは区別されたようである。明治の看護婦という職業は、〈女学生〉や〈新しい女〉が「ハイカラ」な女性として揶揄されたように、「ハイカラ商売」³¹として認識される一方で、その必要な色々な知識と資格は自分のためではなく、社会のために、お国のために「神聖」に使われるべきで、「天使」のような心持も必要とされた³²。

『行人』では、誘惑的な看護婦イメージ、『明暗』では、男性の話し相手になってくれる癒し系の看護婦イメージも読み取られるが³³、『三四郎』における看護婦は「白い」衣服と関連付けられ、まずは〈白衣の天使〉のようなイメージが喚起される。

森の中で看護婦と一緒に立ち、「華やか色の中に、白い薄を染め抜いた帯」に、「真白な薔薇」を頭に一つさしている美禰子の姿は、ただ「白い」とだけ表現されている看護婦とはよく対比を成しているながらも、「綺麗な色彩」として調和を保っている。三四郎はその色彩に見とれながらも「分らない」「矛盾」(二)を感じる。

「(前略)…其眼が三四郎の眸に映った。…(中略)…ヴォラブチュアス!池の女の此時の眼付を形容するには是よりほかに言葉がない」(四の十)と、後で美禰子のヴォラブチュアス(voluptuous:官能的、肉感的)な要素は、彼女の眼つきによって三四郎に気付かされる。森の中で純白な「白い」服の看護婦と共にいた時、「綺麗な色彩」として感じられた美禰子の姿は、彼女の目つきによって「官能的」に変わってしまうのである。つまり、「白い方」として描かれる看護婦表象は、美禰子の誘惑的なイメージと対比を成し、彼女の「官能的」な要素を浮き彫りにする機能をなしたのである。ピュアー(pure)なはずのあるものが誘惑的な内実と共存することを認められない三四郎には、「矛盾」しか感じられなかったのかもしれない。それと同時に、上述した当時の看護婦の遊女的なイメージが美禰子のセクシュアリティとオーバラップされた場合は、看護婦と美禰子が誘惑的なイメージを共有する存在として読者に認識される可能性も考えられる。

原口の描いた「森の女」は、男性たちの視線によって解釈され描かれたものであるが、明治の男性的な欲望の眼差しによって流通された看護婦像が、美禰子像と対比性と類似性を同時にもつ存在として読まれるのであるな

らば、「森の女」は美禰子と看護婦の二人の絵になる。要するに、「森の女」は、明治の男性の視線によって見られ、解釈される女性たち、即ち、セクシュアリティの対象として見られ批判された、明治の〈女学生〉たちと職業婦人を含む〈新しい女〉たちに向けられた、男性の「視覚の快楽」³⁴が生み出したものであるといえよう。美禰子像は世間から揶揄の対象になった〈新しい女〉、平塚らいてうをモデルにしたと知られていることから考えると、看護婦表象は、その純白な「白い」イメージにおいて美禰子の誘惑性を浮き彫りにする一方、その裏側には、近代知識を身につけ、美禰子やよし子のような女学校出身の女性たちと交流できる女性として、また、「青鞥」の女性たちと同類の〈新しい女〉としてのイメージが隠されていて、美禰子像と相反するようで類似している両義性を喚起させる。

おわりに

西垣佐里氏によると、そもそもイギリスヨーロッパにおいて、看護婦は「白衣の天使」として、「良妻賢母」なる主婦は「家庭のナース」、「家庭の天使」として、「癒しの力」をもつとされる³⁵。また三橋修氏は、明治の「家庭なるもの」は、「心に安定をもたらすもの」、「家庭はセクシュアルなものであってはならない」、「家庭には必ず子供が参加する」とし、『三四郎』における美禰子像には、「この安定への不安」があり、「いささかセクシュアルな意味が込められている」とする³⁶。ここでの「心の安定」は、所謂「白衣の天使」のように「家庭の天使」になって夫の心に「癒し」を与えることであろう。

『三四郎』時代の男性たちは、〈白衣の天使〉のように〈純潔・柔順〉な犠牲の道を選んで男性の助力者となる「良妻賢母」を必要とする一方で、自分たちの性的欲望を満たしてくれる女性、即ち、近代の教養を身につけ、自由恋愛観を持つ、「癒しの力」のある女性も必要とした。

即ち、「家庭の天使」としての主婦と、「白衣の天使」としての看護婦は、深い関連性を持っていた存在であるといえる。もし、美禰子の結婚が、明治男性の助力者になる良妻賢母の道に向かうことだとしたら、森の中で彼女と共に登場する看護婦表象は、「白衣の天使」の隣に立つ「家庭の天使」としての美禰子の将来（もちろん男性側の願望による）を窺わせる。そこには、〈純潔・柔順・犠牲〉に満ちる「白衣の天使」のような「家庭の天使」を望む、明治男性の欲望が隠されている。

しかし、〈天使〉と〈妖婦〉という、相反する眼差しで捉えられていた〈看護婦〉と同様、当時の〈女学生〉も〈良妻賢母〉と「墮落」した〈新しい女〉という二重の眼差しを向けられていた。看護婦表象によって美禰子のセクシュアリティが浮き彫りにされる一方、良妻賢母主義を体現する女性を願望する明治男性の欲望も浮き彫りにされる。『三四郎』の男性たちは、明治の女性を解釈する言説のなかで、〈天使〉と〈性的な誘惑者〉の両面を作り出し、そのセクシュアリティの要素を批判する一方で、むしろ楽しんでいる、「視覚の快楽」³⁷を演じている。そのような男性の欲望は、よし子や美禰子のような明治の若い女性を、彼女らの意思とは関係なく、恋愛・結婚相手として「もらうかわらないか」を決めようとするホモソーシャル関係を構築していく³⁸。看護婦という明治の職業婦人も、そのような男性たちの眼差しによって解釈され、お国のために我が身を犠牲にする「天使」として造られていったのである。

以上、『三四郎』における看護婦表象の喚起する意味、さらにその表象と共に置かれることで、「白衣の天使」が「家庭の天使」のイメージを導くなか³⁹、〈新しい女〉と目された美禰子が明治社会の要請する良妻賢母像へと回収されていくことを明らかにしてきた。もう一人の「森の女」は、美禰子にとどまらず、明治の〈新しい女〉のゆくえを象徴するものであったのである。

【註】

※ 本稿における強調のための下線はすべて筆者によるものである。そして漱石作品の引用はすべて、『漱石全集』（岩波書店、1994年）により、旧字を新字に改め、ルビを適宜省略した。（ ）の中は章を示しておく。

1 初出は東京・大阪の両「朝日新聞」、明治41年（1908）9月1日～12月29日、全117回。

李 もう一人の「森の女」

- 2 秦郁彦、『漱石文学のモデルたち』、講談社、2004年12月、p.220
- 3 坪井良子他、「慈恵における看護教育史Ⅱ高木兼寛と教育方針」『看護教育』19巻2号、1978年、p.118
- 4 遠藤恵美子、『派出看護婦の歴史』、勁草書房、1983年12月25日、p.8
- 5 遠藤恵美子、前掲書、p.11～12
- 6 英国セント・トーマス医学校に留学した高木兼寛（1849～1920）が設立した「有志共立東京病院看護婦教育所」（現在の慈恵看護専門学校）で、明治17（1884）年10月授業を開始したのを最初にし、続いて明治19（1886）年4月、同志社を開いた新島襄（1843～90）による「京都看護婦学校」が、同年11月には女子の職業教育に関心をもって来た米国人宣教師ミセス・ツルー（M.T.True, 1841～96）が「桜井女学校付属看護婦養成所」で教育を開始した。こちらについては『日本近代看護の夜明け』（土曜会歴史部会著、医学書院、1973年8月）に詳しい。
- 7 遠藤恵美子、前掲書、p.37～38
- 8 この小説に関して、遠藤恵美子氏の『派出看護婦の歴史』にも少し紹介されているが、ただ「主人公が接した付添看護婦とトレイナード・ナースの印象の違いが、小説風にはあるが、描写されていておもしろい」（p.61）としか評価されていない。
- 9 看護史研究会編、『看護学生のための日本看護史』、医学書院、2006年5月、p.80
- 10 本文引用は「看護婦」（『文芸倶楽部』（2月臨時増刊号）第2巻第2編、明治29（1896）年2月）により、必要に応じて、当用漢字や新かなづかいにした。（ ）の中はページ数。
- 11 この他にも、明治・大正期の「読売新聞」には、無教育な看護婦の弊害に関する記事（「看護婦に関する山根医長の演説」明治32（1899）年9月12日）、看護婦と病院薬局生との密通と墮胎事件（「懐妊を隠して結婚」明治42（1909）年12月12日）、看護婦の万引き事件（「看護婦上がりの万引き」明治42（1909）年12月14日）、看護婦を恋して結婚したいと告白したが断られて自殺した男の話（「女に嫌われ劇薬を呑む」明治44（1911）年1月17日）、入院患者だった早稲田大学卒業生の男と結婚の約束をしている「容貌美しき」看護婦が金に困って盗みの犯罪を犯した事件（「美しき看護婦の犯罪」明治44（1911）年6月13日）、青年医員が看護婦と深い契りを結んだが重ねたが結ばれないことになり、自殺した事件（「女を慕うて劇薬自殺」明治44（1911）年8月6日）、看護婦と患者の同性愛の情死事件（「悲しき同性の恋」大正2（1913）年3月18日）など、教養のない看護婦や性的な対象になっていた看護婦のイメージが分かるような記事は多数見られる。
- 12 村上信彦、『明治女性史 中巻後篇 女の職業』、理論社、1971年4月
- 13 村上信彦、前掲書、p.225
- 14 村上信彦、前掲書、p.240
- 15 明治・大正の「読売新聞」によると、明治45（1912）年4月13日「多くの^{ナイチンゲール}鶯嬢を生む」という記事で、赤十字社の看護婦養成について、大正3（1914）年7月30日「身の上相談」には、ナイチンゲールのような看護婦になりたがる16歳の少女の相談が載せてあり、大正3（1914）年9月4日「白衣婦人の尊き任務—尊敬を拂はれたのは日清戦争の時から」という記事では、「婦人の第一に容貌美しく、柔順で、忍耐強く、注意深い為、之に接する患者の精神状態はよく沈まって病気快復の期を早める」と書いているなど、看護婦を「白衣の天使」と「ナイチンゲール」に喩える言説は多く確認できる。
- 16 前田羽城、『ものと人間の文化史 38、色 — 染と色彩』、法政大学出版局、1980年4月、p.9
- 17 伊原昭、『文学にみる日本の色』、朝日新聞社、1994年2月、p.24、p.204
- 18 城一夫 他、『色彩の歴史と文化』、明現社、1996年11月、p.50～51
- 19 「思い出す事など」（漱石が明治43（1910）年「修善寺の大患」の経験を書いた小品、「朝日新聞」、明治43年10月29日～明治44年4月13日、全33回）には、看護婦へのありがたい気持ち（七の下）や、自分への看護を「神のそれと一般であった」（十八）とする一方、「白衣の看護婦は、静かなる点に於て、行儀の好い点に於て、幽霊の雛の様に見えた。…（中略）…白い着物を着ている女は余の心を善く悟った」（二十二）など、看護婦関連の記述が見られる。
- 20 初出は東京・大阪両「朝日新聞」、大正元（明治45）（1916）年12月6日～同2年11月17日、全167回。
- 21 「（前略）…「ヴォラブチュラス」であることは美禰子だけの個人的象徴ではない。」（p.91）（村瀬士朗、「三」と「四」の^{イコノロジー}画像学—『三四郎』、切斷される少女たち」[小森陽一・石原千秋編、「三四郎」『漱石研究』第2号、1994、翰林書房]）
- 22 美禰子のモデルが形式上は平塚らいてうであることは、小宮豊隆の「あいう女ではないかと思ひながら、僕は美禰子を書いて行つたと、漱石は後に話して聴かせた」（小宮豊隆『漱石寅彦三重吉』（明日香書房、1949、p.109）という証言からも動かさない。（秦郁彦『前掲書』、p.253）
- 23 漱石は、ズーダーマンの小説『アンダイニング・パスト（Undying Past；原題はEs war）』の女子主人公フェリシタスを、「其の巧言令色が努めてするのではなく、殆ど無意識に天性の発露のままて男を擒とする所、勿論善とか悪とかの^{とどろこ}道徳的観念も無いで遣つてゐるかと思はれるやうなもの」であると評し、彼女を「無意識の偽善家」と称する。（『文学雑話』、『早稲田文学』、1908年10月、p.26）これは美禰子像の形象に際し多くの参考になってきた。
- 24 「漱石という人は一般に、明治という新しい時代にふさわしい「新しい女」を描きだした作家として評価されている。その典型的な例とされるのが、『三四郎』の美禰子である」（佐伯順子、『「色」と「愛」の比較文化史』、岩波書店、1998年1月27日、p.220）

- 25 特に、飯田氏は、「美禰子があの日の肖像画を描かせた意図、その恋愛の対象、結婚の意味、多くの議論を呼んできたこれらの問題は、透明ではない語り手の欲望が作り出した〈謎〉である」と述べながら、語り手が美禰子の服装を語らない〈謎〉を解釈している。(飯田祐子「女の顔と美禰子の服—美禰子は〈新しい女〉か」[小森陽一・石原千秋編「三四郎」『漱石研究』第2号、1994、翰林書房])
- 26 小森陽一、「個人と活字『三四郎』における文字のドラマツルギー」(『現代思想』1993年10月)
- 27 中山和子、『『三四郎』—「商売結婚」と新しい女たち」(『漱石研究』第2号、前掲書)
- 28 「田舎の高等学校を卒業して東京の大学に這入った三四郎が新しい空気に触れる、さうして同輩だの先輩だの若い女だのに接触して色々動いて来る、手間は此空気のうちに是等の人間を放す丈である、あとは人間が勝手に泳いで、自ら波瀾が出来るだらうと思ふ、さうこうしてゐるうちに読者も作者も此空気にかぶれて是等の人間を知る様になる事と信ずる、もしかぶれ甲斐のしない空気で、知り栄えのしない人間であつたら御互に不運と諦めるより仕方がない、ただ尋常である、魔訶不思議は書けない。」(『漱石全集』(第十六巻)、p.252)、明治41(1908)年8月19日、「東京朝日新聞」に出した『三四郎』予告文で、漱石の作品執筆の意図と発展の経緯が明らかにされている。
- 29 すでに明治17(1884)年頃、慈恵医院看護婦教育所で養成された看護婦たちは、上流家庭に近づく機会が多く、見込まれて外国留学の幸運に恵まれる者もあったし、それだけに行儀、作法、言葉遣いのしつてもきびしかった。(立川昭二『明治医事往来』、新潮社、昭和62(1987)年2月、p.182)
- 30 「女子職業案内」『近代女性文献資料叢書26—女と職業』第2巻、大空社、1993年5月、p.29~30
- 31 「ハイカラ商売—(前略)…看護婦でも病家は金持や富豪で見るもの聞くものは贅沢な物が多いから自然奢侈にも成る、…(中略)…白い看護服を着て居ない時は何所^{どこ}の夫人かと思ふ程のハイカラを遣る者もある、…(中略)…體能^{ていよ}よく云へばハイカラ商買^{しょうばい}、實は申せば道楽商買であるから、決して自分は娘を看護婦に致さうとは思はぬ、…(後略)」(「女子職業案内」、前掲書(第2巻)、p.282)
- 32 看護婦の要件の第一は、「慈悲、耐忍の精神と、種々の困難^{あたら}勞苦に耐ふる程の身体の健康など」で、「その事業は極めて崇高で神聖な事柄で、自分は天使にでも為った心持で欲得を離れてこの任務^{あたら}に膺らぬばならぬ」(「女性職業案内」、前掲書(第2巻)、p.251)
- 33 『明暗』四章では、津田の「退屈^{あたら}凌ぎに好い相手」になり、彼と対話する看護婦が描かれているが、これについては別稿で詳細に論じたいと思う。
- 34 「見るという行為の快樂は、視る者=能動的/男、視られる者=受動的/女、という二分法を成立させている政治学と決して無縁ではありえないのだ。」(武田美保子、『〈新しい女〉の系譜—ジェンダーの言説と表象』、彩流社、2003年5月31日、p.71)
- 35 西垣佐里、「『家庭の天使』から『白衣の天使』へ—Little Dorritにみるnursingの実践をめぐって」『関西学院大学英米文学』第43巻第1号、1999年2月、pp.59~71.
- 36 三橋修、『明治のセクシュアリティ—差別の心性史』、日本エディタースクール出版部、1999年2月、p.196~197.
- 37 ローラ・マルヴィ(Lulvey, Laura)による、「見るという行為を通し、他人を性欲の刺激の対象とすることによって生じる喜び」の指摘。(岩本憲児・武田潔・斉藤綾子編、「視覚的快樂と物語映画」『「新」映画理論集成1—歴史/人種/ジェンダー』、フィルムアート社、1998年、p.435)
- 38 セジウィックは、男性的父権秩序が男同士の間で女を交換し譲渡しあう、ホモソーシャル関係によって成立していること、それゆえこのホモソーシャル関係は異性愛を基盤としていること、だからこの秩序は必然的に同性愛嫌悪と女性蔑視を内包していることを明らかにして見せる。(武田美保子、『〈新しい女〉の系譜—ジェンダーの言説と表象』、彩流社、2003年5月、p.246)
- 39 紙幅の関係により、「白衣の天使」と「家庭の天使」との関係については別稿で詳細に論じる予定である。